

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第286集

長土呂遺跡群

下聖端遺跡Ⅷ

長野県佐久市長土呂 下聖端遺跡Ⅷ発掘調査報告書

2022. 3

佐久市教育委員会

例言

1. 本書は、K'sオフィスが行う宅地造成工事に伴う長土呂遺跡群下聖端遺跡Ⅷの発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 K'sオフィス 代表 黒澤周一
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び調査面積 長土呂遺跡群 下聖端遺跡Ⅷ(NK SⅧ) 203m²
5. 所在地 佐久市長土呂字下聖端193-2 外
6. 調査期間 令和3年4月12日～4月28日(現場発掘作業)
令和3年4月～令和4年3月(報告書作成作業)
7. 調査担当者 富沢一明
8. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡例

1. 遺構の略記号は、住居址(H)・土坑(D)・溝(M)である。
2. 挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
3. 遺構の標高は遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
5. 挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。



発掘調査状況

目次

例言・凡例・目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

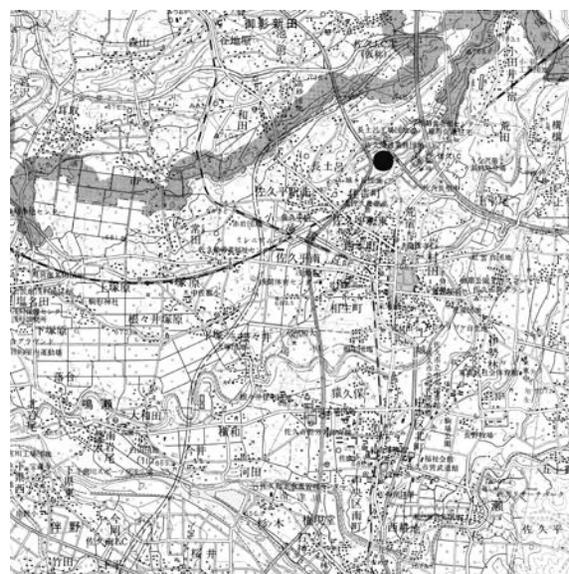
1. 経過と立地
2. 調査体制
3. 調査日誌
4. 遺構・遺物の概要
5. 標準土層
6. 調査の方法

第Ⅱ章 遺構と遺物

1. 竪穴住居址
2. 土坑
3. 溝状遺構
4. ピット

第Ⅲ章 調査のまとめ

写真図版(遺構・遺物)



第1図 下聖端遺跡Ⅷ位置図

第 I 章 発掘調査の経緯

1. 経過と立地

下聖端遺跡Ⅷは、佐久市長土呂に所在し、長土呂遺跡群の南東よりに位置する。遺跡は田切台地上の縁近くに立地する。台地周辺の海拔は730m前後を測る。

本遺跡の周辺は、上信越自動車道建設や区画整理事業等により多くの開発が行われ、先行して埋蔵文化財発掘調査が数多く行われている地域である。周辺の遺跡としては約10万㎡の調査がなされた聖原遺跡や国道141号バイパス建設に伴い調査が行われた上芝宮・下聖端遺跡がある。特に北側に近接する聖原遺跡は古墳時代から平安時代の堅穴住居約1000軒が検出され、多種多様な出土遺物があった。和同開珎をはじめとする皇朝十二銭や甲斐国の郡名が暗文技法で記載された甲斐型土器「鉢」、金属製品として、八稜鏡・馬鈴・銅碗・腰帯金具・焼き印があり、また、「伯万私印」と刻まれた石製印等があった。聖原遺跡はその規模や出土遺物の内容から佐久郡衙に比定する考えもあったが、現在では郡衙の中核とは考えづらい状況であると報告されている。今回の調査は下聖端遺跡内の8次調査で、下聖端遺跡では主に古墳時代から平安時代の集落遺跡が調査されている。

今回、遺跡群内においてK'sオフィスにより宅地造成の計画がされ、市教育委員会を通し県教育委員会に文化財保護法93条の届出があった。市教育委員会では試掘・確認調査を行い、その結果から遺跡の保護措置がとれない道路部分で記録保存目的の発掘調査を行うこととなった。

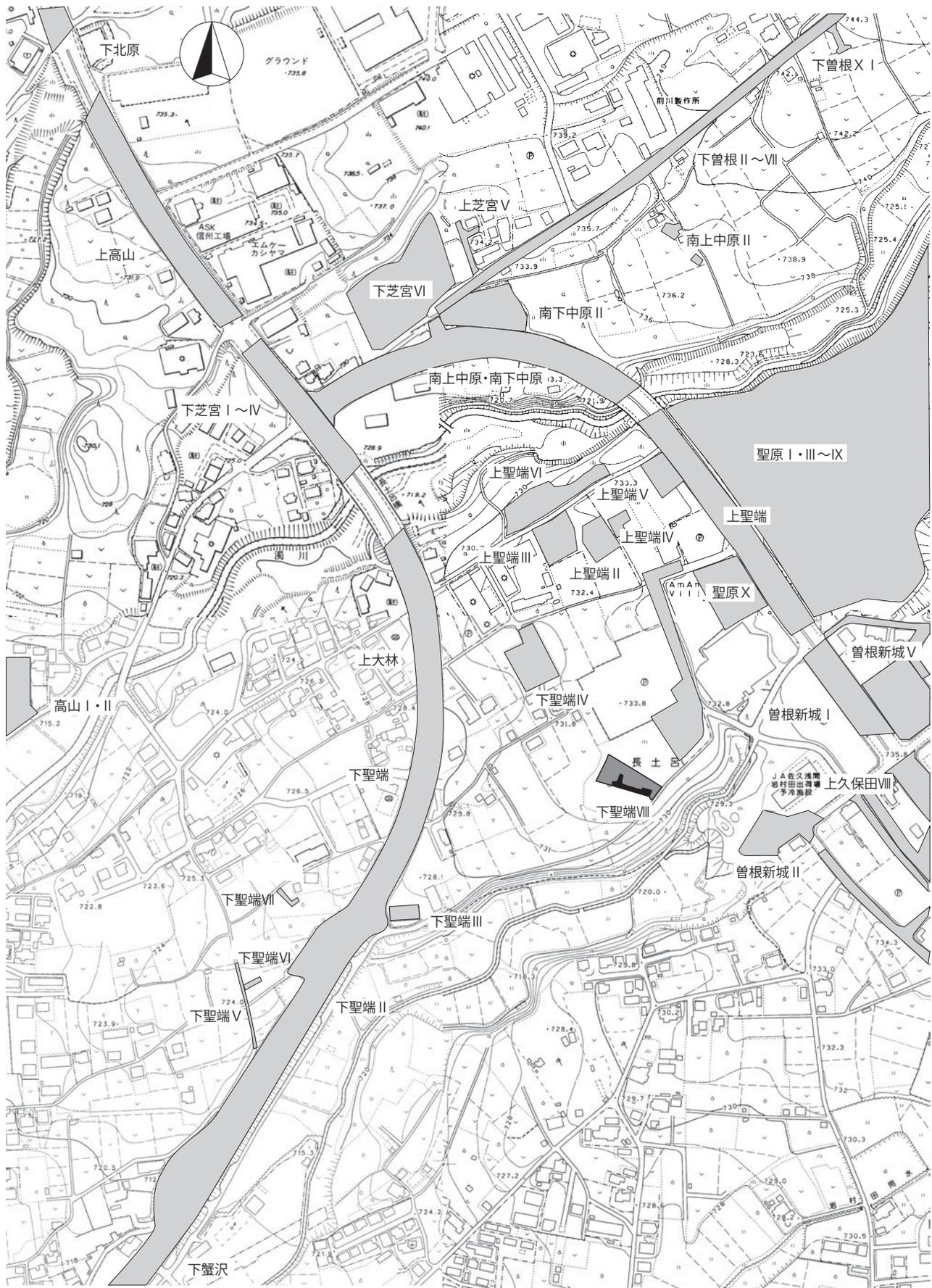
2. 調査体制

調査受託者 佐久市教育委員会 教育長 榎澤晴樹(令和3年5月まで)
吉岡道明(令和3年6月より)

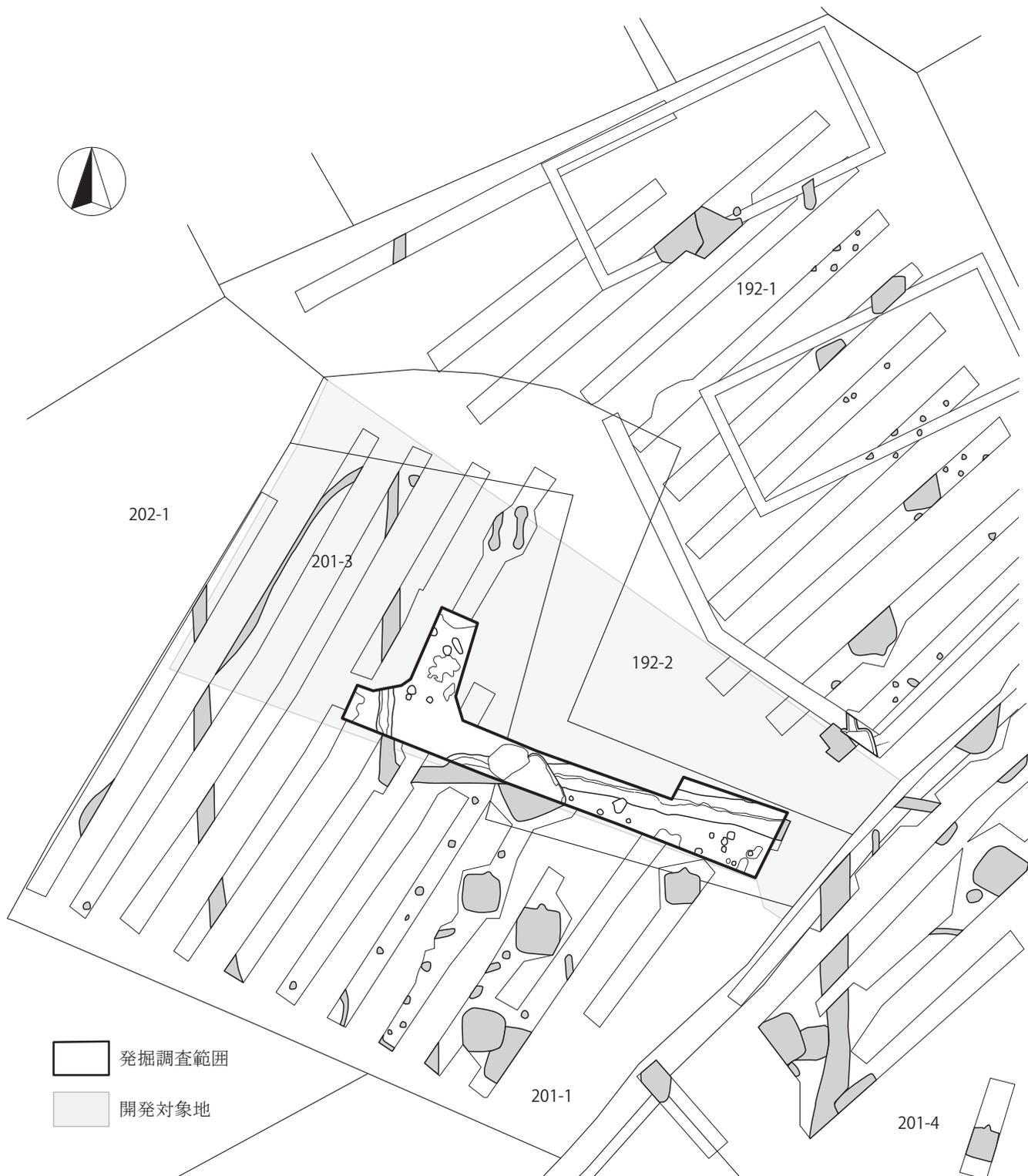
事務局	社会教育部長	土屋 孝					
	文化振興課長	平林照義					
	企画幹	谷津和彦					
	文化財調査係長	山本秀典					
	文化財調査係	小林眞寿	羽毛田卓也	富沢一明	上原 学	久保浩一郎	
	調査員	浅沼勝男	小林妙子	依田好行	中澤 登	田中ひさ子	
		橋詰勝子	橋詰信子	箕輪由紀	高野園美		

3. 調査日誌

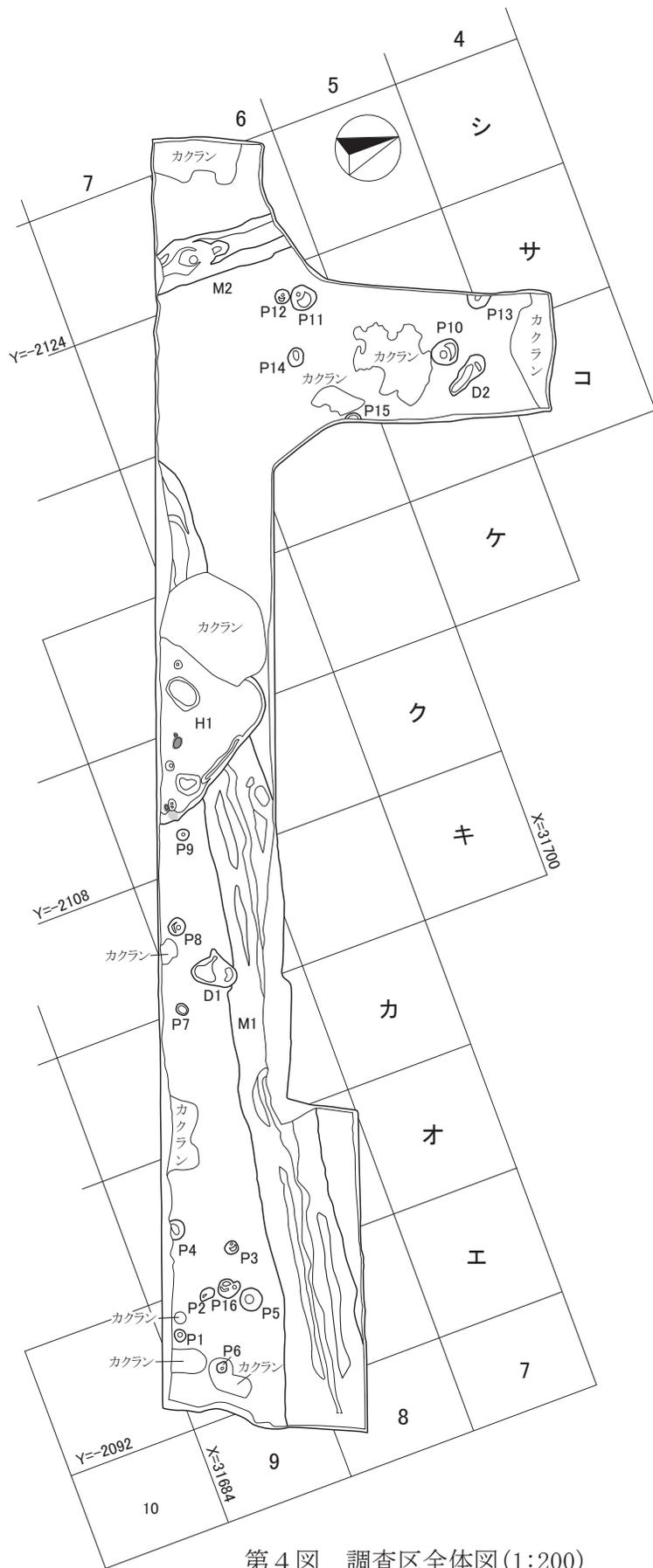
令和2年	11月11日	K'sオフィスより土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
	11月13日	長野県教育委員会へ市教育委員会より2佐教文振第1415-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について(副申)
	11月20日	長野県教育委員会より2教文第7-1387号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
令和3年	3月1日	K'sオフィスより埋蔵文化財調査費概算見積依頼が提出。
	3月3日	市教育委員会より見積回答。
	4月2日	K'sオフィスと市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結。
	4月12日～28日	記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行い、引き続き報告書作成業務を行う。
令和4年	3月	調査報告書を刊行する。記録類・出土品を整理保管しすべての業務を終了する。



第2図 周辺遺跡位置図



第3図 調査範囲及び周辺部遺構確認調査図(1:500)



重機による表土剥ぎ状況



基準点設置状況



遺構検出状況

4. 遺構・遺物の概要

遺構	竪穴住居址	1軒(平安)	土坑	2基
	溝状遺構	2本		
遺物	土師器 須恵器	鉄製品		

5. 標準土層

今回の調査地点は南方向に僅かに傾斜する台地上で、基本層序は3層に分かれる。

第Ⅰ層 (10YR8/3)浅黄橙色土 盛土

第Ⅱ層 (10YR4/1)褐灰色土 耕作土

第Ⅲ層 (10YR5/6)黄褐色土 浅間P1

Ⅲ層上面が遺構確認面である。しかし、後世のカクランが激しい部分も多く、Ⅱ層の耕作土が深く遺構を削平している部分もあった。

6. 調査の方法

遺構調査・遺構測量

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。

遺物は分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNo.を付け3次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構No.で一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遺り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手で行い、室内乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。遺構図面は1/20で測量実測した図を1/40で修正し、遺物は1/1で実測し、それぞれ仮図版を作成した。

写真・報告書

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。

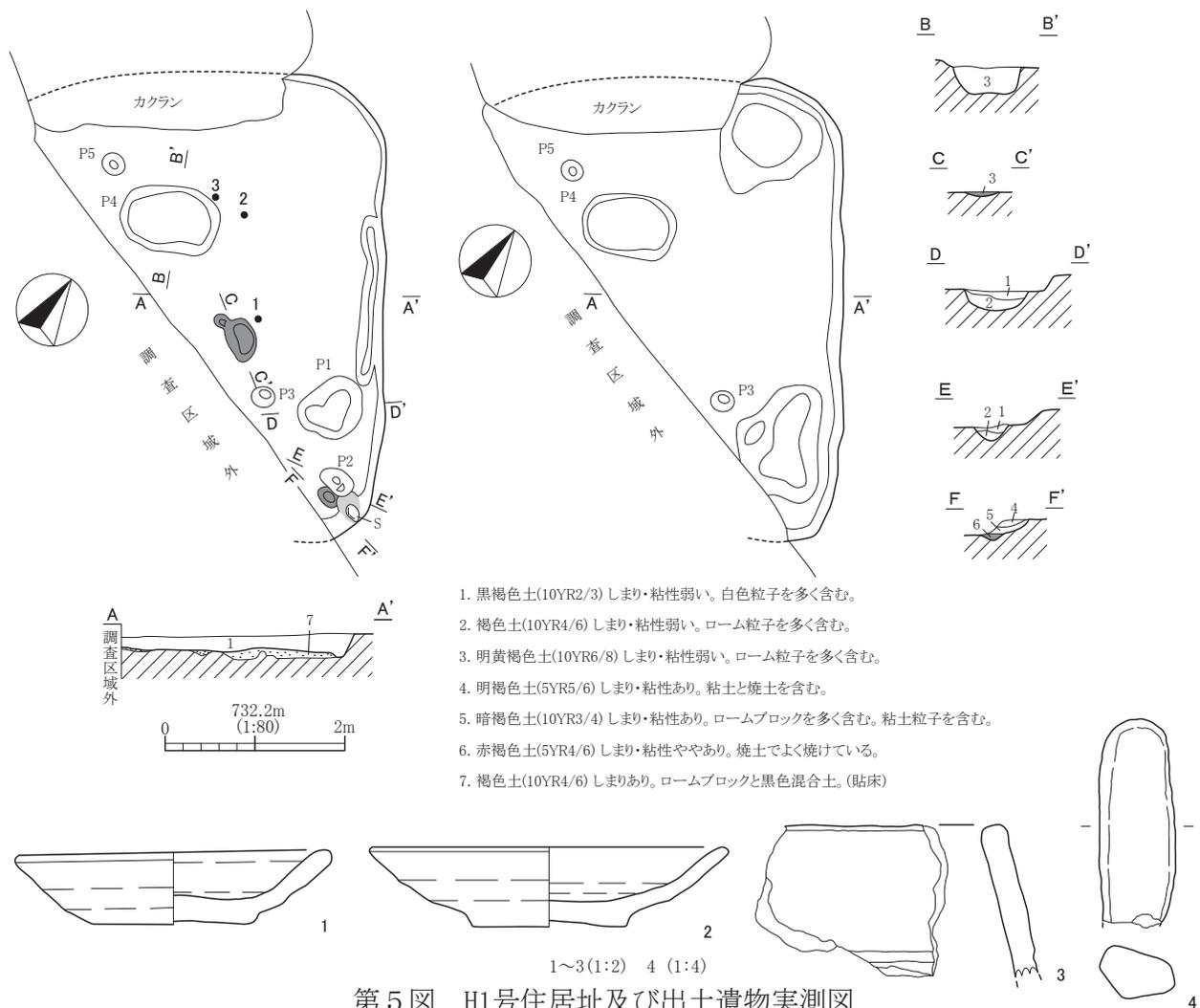
遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。報告書挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「インデザイン」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。

第Ⅱ章 遺構と遺物

1. 竪穴住居址

(1) H1号住居址

本址は調査地中央で検出された。残存状態は住居址の南側半分が調査区域外、北壁部分がカクランにより削平されている。形態は方形と考えられ、カマドは南東コーナー隅で検出された。規模は南北長4.68m、検出東西長3.60mを測る。壁高さは北東コーナー付近で0.20mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-110°-Eを測る。住居の床面積は検出された部分で6.48㎡を測る。覆土は自然堆積で、床は全体に軟質であった。貼床の厚みは0.02~0.12mを測る。壁溝は東壁の一部で検出され



第5図 H1号住居址及び出土遺物実測図

た。幅は0.06~0.07m、深さが0.05~0.07mを測る。ピットは5カ所検出された。ピットの規模はP1が径0.70m・深さ0.21m、P2が径0.39m・深さ0.17m、P3が径0.27m・深さ0.61m、P4が径1.11m・深さ0.38m、P5が径0.25m・深さ0.53mを測る。P4は形態的に土坑とした方がよいかも知れない。住居址掘り方はほぼ平坦であったが、北東コーナーと南東コーナーに床下土坑状の掘り込みが検出された。規模は北東側が長軸長1.15m・深さ0.19m、南東側が長軸長1.30m・深さ0.26mを測る。

カマドは住居南東コーナーで検出された。いわゆる「コーナーカマド」と呼ばれるタイプの住居址と考えられる。左袖と火床部が検出された。袖は粘土と礫により構築されていた。火床部はよく焼けており、焼土は径0.23m・厚み0.07mを測る。また、本址は住居中央床面上によく焼けた炉的な部分が検出された。径は0.58m・厚み0.04mを測る。

本址からの出土遺物は非常に少なく4点を図示した。1と2は土師器皿で非常に小型である。ロクロ成形で、底部はいずれも右回転の糸切離しである。3は土師器鍋の口縁部破片である。罌がつくタイプのもと考えられる。4はP4脇から出土した。白色でわずかに敲击痕が確認できるが確認を得ない。本品はその特徴より珪化木と考えられる。

本址は出土遺物が少なく年代的な位置づけに苦慮するが、住居址形態や非常に小さな土師器皿などの出土から11世紀後半から12世紀前半に位置づけられると考える。

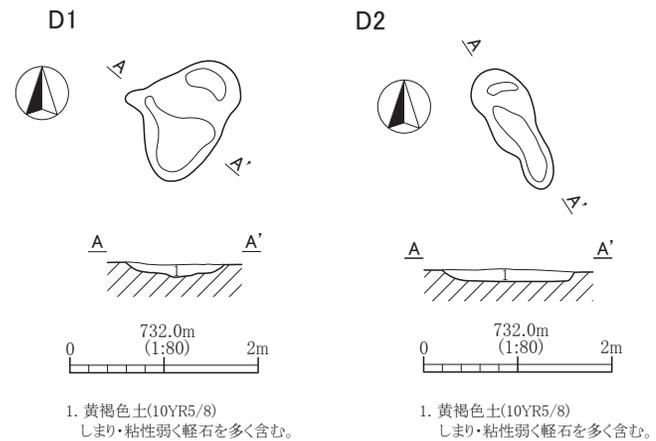
2. 土 坑

(1) D1号土坑

本址は調査地中央で検出された。新旧関係はM1号溝状遺構よりは新しい。形態は不整形で、規模は長軸長1.38m・短軸長1.08m・深さ0.31mを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏の口縁部破片が1点出土したのみであった。

(2) D2号土坑

本址は調査地西よりで検出された。形態は不整形である。規模は長軸長1.38m・短軸長0.48m・深さ0.22mを測る。本址からの出土遺物は無かった。



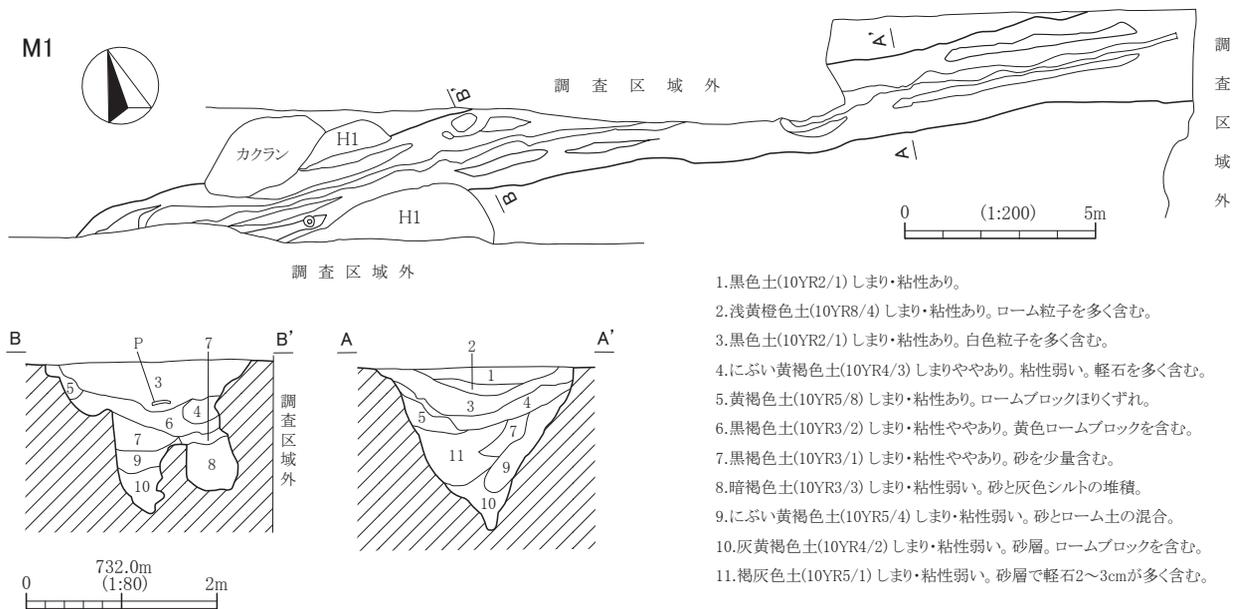
第6図 D1号・D2号土坑実測図

3. 溝状遺構

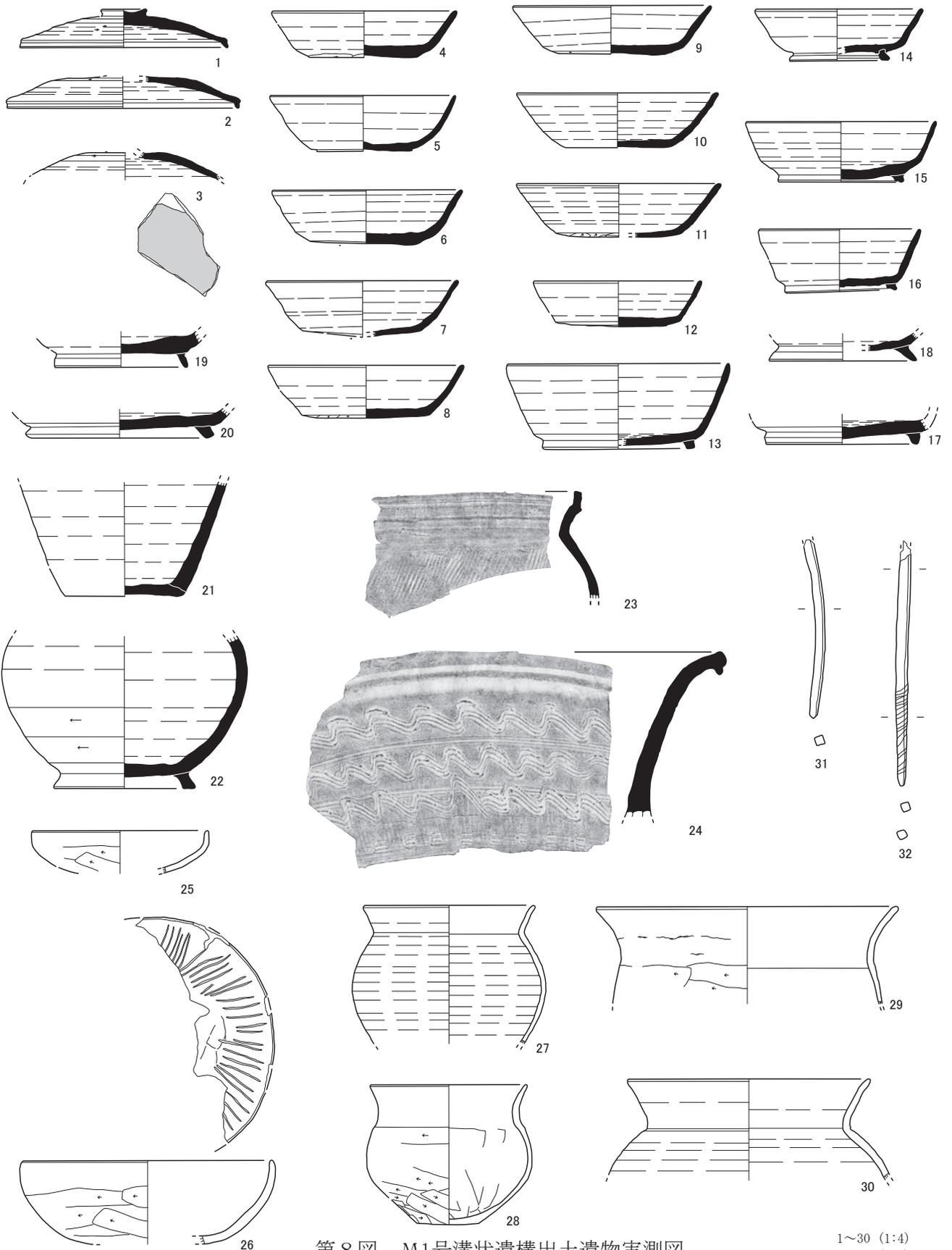
(1) M1号溝状遺構

本址は調査地中央で検出された。東西方向に延びる溝状遺構で、検出された長さは26.1mを測る。規模は幅1.00~1.30m、深さ1.07~1.62mを測る。東端と西端の比高差は西側が0.35m低い。断面形態は逆台形で、特に溝底面は人が一人立てる幅しかなかった。また、底面は直線を指向するが、流水の影響か部分的に曲がっていた。

本址から出土遺物は比較的多く、32点を図示した。出土遺物の多くは覆土上層の1~3層からの出土であり、それより下の層からは出土が皆無であった。1~3は須恵器蓋である。1のみつまみ部が確認できた。また、3は内面がよく研磨されており、転用硯の可能性もある。4~12は須恵器坏である。いずれもロクロ成形で、底部は回転糸切り離し、切り離しの後周辺部へラ削り、底部へラ削りの三種類が確認された。13~20までは須恵器有台坏である。いずれも高台は貼付で、20は特に内面見込み部に自然釉の付着が顕著であった。21と22は須恵器壺と考えられる。21は無台であり、直線的に胴部が立ち上がる事からいわゆる「壺G」と呼ばれる器種になる可能性がある。22は球形胴部に高台を貼付したもので、内面に自然釉の付着がみられる。



第7図 M1号溝状遺構実測図



第8図 M1号溝状遺構出土遺物実測図

1~30 (1:4)
31・32 (1:2)

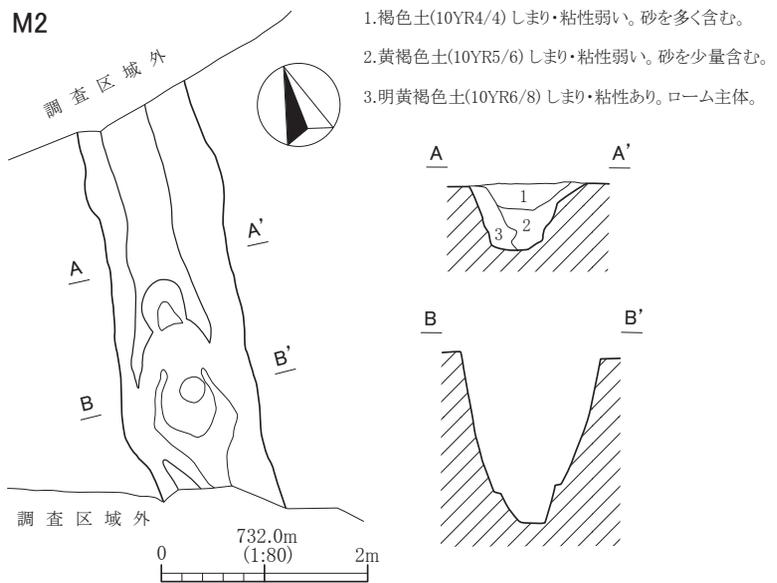
23と24は須恵器甕である。23は頸部が短い広口甕と考えられる。外面はタタキが確認できる。24は大型の甕口縁部の破片である。口縁部外面に2段の沈線と三段の波状文が施文されている。また、頸部付近には、波状文施文の同一工具を使ったと考えられる、列点状の押し引きのような施文が確認できる。25と26は土師器坏である。25は皿状の器形で、体部外面はへら削りを行い、胎土はよく精練されている。26は大型の坏で、25と同様によく精練されている。内面の体部に放射状の暗文が施されている。27～30は土師器甕である。27と30はロクロ成形が行われたいわゆる「ロクロ甕」である。29は頸部から口縁部がやや「コ」の字状になるいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる甕に当てはまると考えられる。31と32は鉄製品で、32は柄部と考えられる部分に糸状の巻きつけ痕跡が確認できるため鉄鍔の一部と考えられる。

これらの出土遺物から、本址は8世紀代の所産時期が考えられる。しかし、先にも述べたようにこれらの遺物はすべて覆土上層のものであり、下層からの出土遺物はなかった。その為8世紀代にはM1号溝状遺構は2/3が埋まった状態であった事が推測できる。その点を考慮すると本址は8世紀以前の掘削と使用が考えられ、聖原遺跡との比較の場合はその点を考慮する必要がある。

(2) M2号溝状遺構

本址は調査地西よりで検出された。南北方向に延びる溝と考えられ、前述したが今回検出された南側で東側に「L」字形に曲がりM1号溝状遺構につながる事が過去の試掘調査で分かっている(第3図参照)。検出された規模は、検出長3.62m・幅1.06～1.28m。深さは0.51～1.60mを測る。溝壁は緩やかに立ち上がる。溝底面は北側が逆台形状でほぼ平坦であったが、南側は大きく深く掘り込まれていた。深く掘り込まれた部分は下層に砂の堆積が確認できた。

本址からの出土遺物はなかったが、M1号溝状遺構とつながる事から、同一時期と判断したい。



第9図 M2号溝状遺構実測図

4. ピット

今回の調査では16カ所の単独ピットを調査した。ただ、調査区が東西に細長い事から、掘立柱建物址の一部やそれに関係するであろうピットは把握できなかった。唯一、P3とP6とP16が東西ラインで並ぶ事が確認できた。

ピットからの出土遺物はP8より土師器甕片3点が出土したのみである。

第1表 ピット計測表

		()推定 <>残存 (単位 m)									
遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形態	遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形態
P1	エ-9	0.36	0.34	0.11	円形	P9	ク-8	0.33	0.32	0.25	円形
P2	エ-9	0.49	0.25	0.18	楕円形	P10	コ・サ-5	0.85	0.75	0.62	円形
P3	オ-9	0.37	0.37	0.11	円形	P11	サ-6	0.83	0.77	0.46	円形
P4	オ-9	0.60	<0.47>	0.18	不明	P12	サ-6	0.42	0.39	0.15	円形
P5	エ-9	0.66	0.64	0.24	円形	P13	サ-4・5	0.70	<0.42>	0.61	不明
P6	エ-9	0.36	0.30	0.22	楕円形	P14	サ-6	0.57	0.44	0.68	円形
P7	カ-8 キ-8・9	0.37	0.29	0.07	楕円形	P15	コ-6	0.40	<0.15>	0.10	不明
P8	キ-8	0.55	0.48	0.30	円形	P16	エ-9	0.70	0.43	0.23	不整形

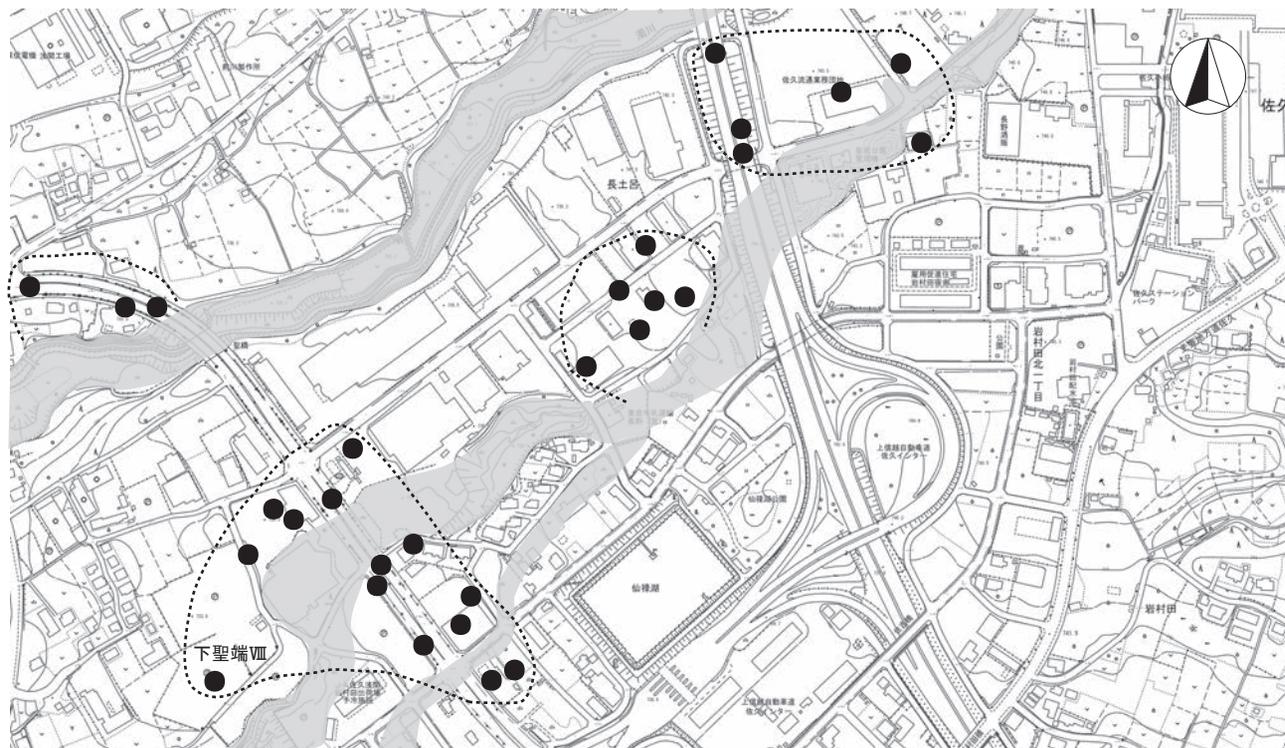
第三章 調査のまとめ

今回の発掘調査は面積203㎡、幅4mという限られた範囲の調査であったが、周辺地域の調査を補う形で調査成果があった。それらを列記して調査のまとめとしたい。

まず、H1号住居址についてである。H1号住居址はカマドが住居の南東コーナーにあるいわゆる「南東カマド住居」と呼ばれるタイプのものである。このタイプの住居は出土遺物からおおむね11世紀代～12世紀前半代の帰属時期が考えられている。今回調査されたH1号住居址も遺物は少なかったが、11世紀後半～12世紀前半とした。これらの時期の住居址は隣接する聖原遺跡の調査成果から、田切台地縁に偏り存在することが指摘されている(第10図参照)。今回も東側の田切に寄った位置からの検出となった。しかし、周辺部の同一時期の集落分布をみると田切を挟んで対岸にも住居が分布することが確認できる。この事は一つの可能性を指摘できる。つまり、集落を分断する田切は12世紀以降に発達し現在の幅と深さになったのではないかという事である。実際に曾根新城遺跡の住居は半分が田切に落ちてしまった状態で検出されている。だとすると、この時期の住居が田切縁辺に多く分布するという考え方ではなく、ある程度の窪地を取り囲むように集落が形成されていたとみることもできる。旧来より幅や深さが発達する田切としない田切の問題は注目されていたが、今回のような調査事例がその問題の糸口となるのではないだろうか。

2点目として、M1号溝状遺構についてである。本址は下層に砂が溜まり、溝底面は複雑な形となっていたが、形状や検出位置から明らかに人工物と考えられる。特に「L」字に屈曲することから何らかの施設を囲む区画溝の性格が考えられていた。しかし、周辺部の調査成果を援用すると、少なくとも東側を「ロ」の字状に囲む可能性は非常に低いことが分かる。本址の性格は今後周辺部の調査成果に委ねるが、台地上の聖原遺跡をはじめとする各遺跡で検出された溝状遺構の性格や成立年代の大局的な考察が必要な時期に来ていると考える。

以上、雑駁ではあるが今回の発掘調査のまとめとした。



第10図 11世紀後半から12世紀代の住居分布



H 1号住居址



H 1号住居址掘り方



D 1号土坑



D 2号土坑



M 2号溝状遺構



調査区全景（東より）



M 1号溝状遺構土層堆積状況（東側）

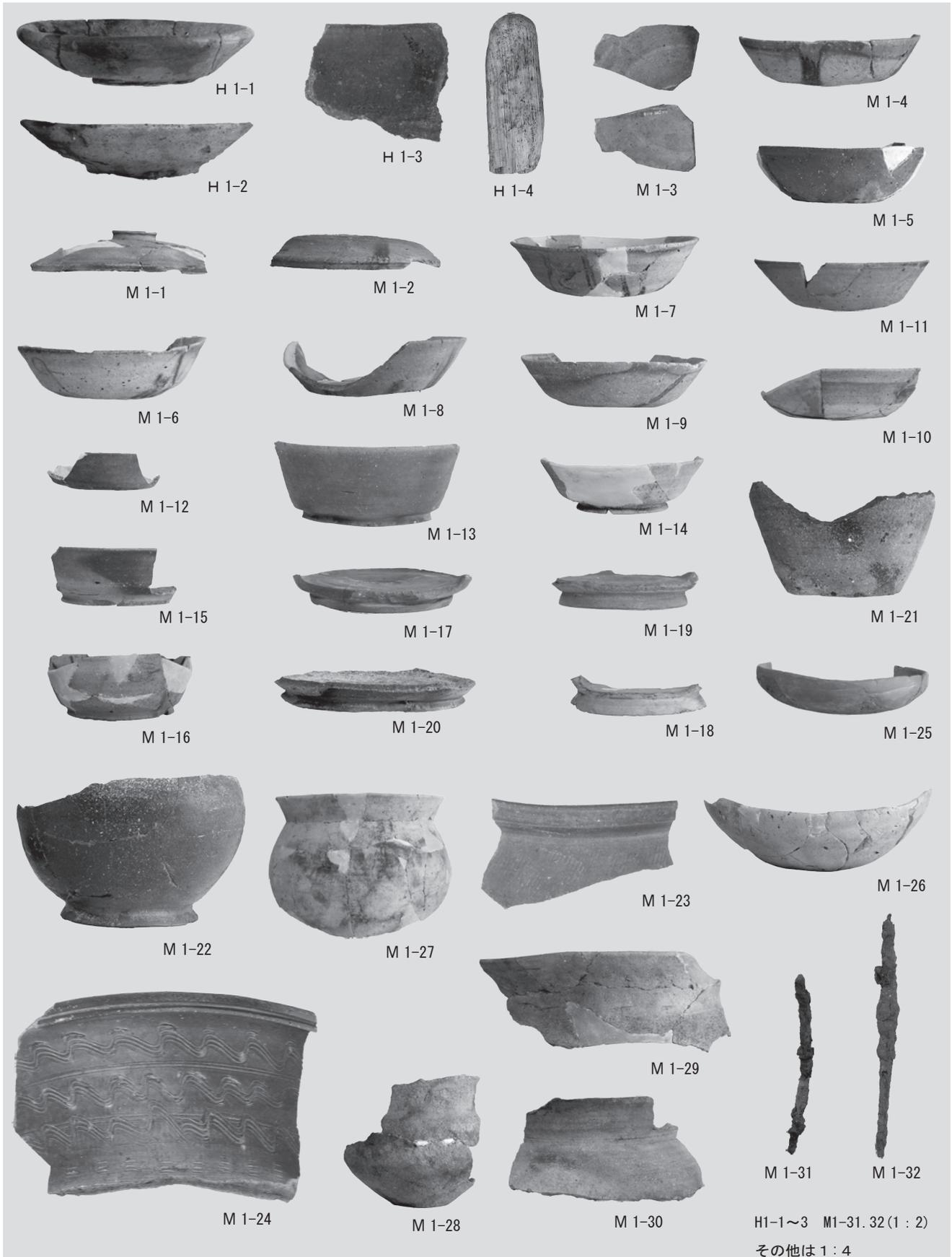


M 1号溝状遺構土層堆積状況（西側）

図版 2



M 1号溝状遺構（西より）



H1-1~3 M1-31. 32(1:2)

その他は1:4

報告書抄録

ふりがな	ながとろいせきぐん しもひじりばたいせきはち							
書名	長土呂遺跡群 下聖端遺跡Ⅷ							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第286集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 社会教育部 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込2913 TEL0267-63-5321 FAX0267-63-5322							
発行年月日	2022年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ながとろいせきぐん しもひじりばたいせき はち 長土呂遺跡群 下聖端遺跡Ⅷ	さくしながとろ あざしもひじりばた 佐久市長土呂 字下聖端 193-2ほか	20217	9	36° 17.08	138° 28.35	20210412 ～ 20210428	203	宅地造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
長土呂遺跡群 下聖端遺跡Ⅷ	集落址	古代	住居址 溝状遺構 土坑	1軒 2本 2基	須恵器 土師器 鉄製品			
要約	周辺の調査事例と同様に古代と考えられる竪穴状住居址が検出された。特に11世紀～12世紀代と考えられる竪穴住居址は周辺の調査成果とあわせて希少な資料追加となった。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第286集

長土呂遺跡群 下聖端遺跡Ⅷ

2022年 3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒385-0051 長野県佐久市中込2913

TEL0267-63-5321

印刷所 キクハラインク株式会社